

# 廬山寺蔵『選択集』第十五章段における『観念法門』の引文をめぐる

——最後の一文が削除された理由を中心に——

春 本 龍 彬

## 一、はじめに

浄土宗の宗祖である法然上人（以下、敬称を省略する）は建久九年（一一九八）頃、前関白九条兼実の要請に応じ、て『選択本願念仏集』（以下、『選択集』と記す）を撰述し、弥陀・釈迦・諸仏が三仏同心に阿弥陀仏の本願に基づく称名念仏を往生行として選択している旨について主張したが、京都市上京区にある天台淨土宗の寺院、廬山寺には『選択集』の草稿本と見做されている古鈔本（以下、『廬山寺本』と記す）が伝承されている。

「廬山寺本」は草稿本であるが故に現存する他の『選択集』諸本には確認されない文字や文章、記号、訂正の痕跡を多数有しており、これまでも書誌学、更には国語学、言語学、文献学、仏教学、宗学等といった多種多様な学問領域から多角的、且つ総合的に「廬山寺本」の実態を解明せんとする論考が先学達によって積み重ねられてきた。<sup>①</sup>

例えば、現状の「二八丁才」二八丁ウ」に記されている阿弥陀仏の本願成就に関する問答、並びに「八六丁ウ」八九丁才」に存在する『無量寿経』と『観無量寿経』の説示順序を議論した問答は全て見せ消ちされていることもあったか、研究の対象となる機会が多かったように思える。

そして「廬山寺本」研究の現状を鑑みた場合、上述したような問答の成立過程に加え、それらの問答が消去された事情等に纏わる諸問題は、必ずしも十分とは言えないまでも、その実態がほぼ明らかにされつつある。

しかし管見の限り、「廬山寺本」第十五章段における『観念法門』の引文をめぐっては、これまでに他『選択集』諸本には見られない「此<sup>レ</sup>ハ是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁<sup>ナリ</sup>」という一文が含まれていること、或いはその一文が鉤によって見せ消ちされていることは認められていたものの、単にその存在が認識される程度に留まり、全く論及されてこなかったようである。

そこで本稿ではそのような状況を踏まえた上で、「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』を取り上げ、何故「此<sup>レ</sup>ハ是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁<sup>ナリ</sup>」の一文まで当初は引用していたにも関わらず、最終的には不要と判断して削除したのか、文章が削除された理由を中心に考察してみたい。

## 二、推敲跡の確認

### 1、原本の状態

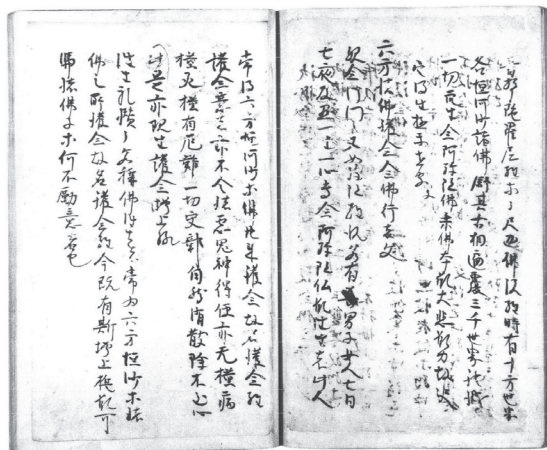
考察に先立ち、本節では先ず「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』がどのような状態になっているのか確認して行きたい。

「廬山寺本」第十五章段は篇目に「六方ノ諸仏護<sup>シタマフ</sup>念<sup>シタマフ</sup>仏ノ行者<sup>ヲ</sup>一文<sup>⑥</sup>」と掲げられている通り、六方の諸仏が念仏の行者を護念してくださることについて述べられている章段である。引文として①善導の『観念法門』、並びに②善導の『往生礼讃』が提示されており、私釈段では問答体によつて六方の諸仏以外にも阿弥陀仏や観世音菩薩、勢至菩薩といった二十五菩薩、更には四天王、八部衆までもが念仏の行者を護念してくださる旨に関して言及されている。

本稿で取り上げているのは上述した内の①の箇所であり、第十五章段の典拠として『観念法門』の五種増上縁義の中、護念増上縁の第五の文が引用されている部分である。今、原本の様子を確かめるために現状の「九六丁ウ・九七丁オ」の影印資料、及び翻刻資料を示せば以下の通りである。

【影印資料】<sup>(7)</sup>

「九六丁ウ・九七丁オ」



【翻刻資料】<sup>(8)</sup>

音声<sup>(9)</sup>陀羅尼經等云釈迦仏説經時有十方世界  
各恒河沙諸仏舒其舌相遍覆三千世界証誠  
一切衆生念阿弥陀仏乘仏本願大悲願力故決  
定得生極樂世界文

六方諸仏護念念仏行者文

觀念法門云又如弥陀經説若有男子女人七日  
七夜及尽一生一心專念阿弥陀仏願往生者此人  
常得六方恒河沙等仏共來護念故名護念經  
護念意者亦不令諸惡鬼神得便亦無橫病  
橫死横有厄難一切災難自然消散除不至心  
此是亦現生護念増上縁  
往生礼讃云若称仏往生者常為六方恒沙等諸  
仏之所護念故名護念經今既有斯増上誓願可  
憑諸仏子等何不勵意者也

上掲した資料に基づくのであれば、「九七丁才四行目」には確かに「此<sup>レ</sup>ハ是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁ナリ」と記されていることが理解される。ただし、行頭には鉤が書き込まれているため、最終的にはその一文が見え消ちされたと判断して良いであろう。

## 2、削除のタイミング

では何時「九七丁才四行目」の「此<sup>レ</sup>ハ是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁ナリ」という一文が削除されたのであろうか。削除されたタイミングとして、以下の四パターンを想定することが可能である。

i 執筆の最中にその場で削除された。

ii 執筆が少し進んだ段階で削除された。

iii 本文を執筆した後、点検する中で削除された。

iv 後世に他本と対校して削除された。

この中、結論を先に述べるのであれば、筆者は「此<sup>レ</sup>ハ是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁ナリ」の一文が削除されたタイミングは i ~ iii のいずれかの時点であったと考える。

なぜならば(一)「廬山寺本」には対校を行った旨の奥書(例えば「一交了」等<sup>(9)</sup>)が記されておらず、更に(二)本文中のどこを探しても異本註記(例えば「イ」等<sup>(1)</sup>)が一切見当たらないからである。

もし、本稿において取り上げている事跡が iv のタイミングで施されたもの、つまり後世に他本と対校した際に筆記された鉤であるならば(一)、もしくは(二)のような痕跡が「廬山寺本」に確認される可能性は非常に高いと思われる。更に言えば、「廬山寺本」自体にそのような痕跡が遺されていないにしても、浄土宗の根本聖典である『選択集』という書物の性格を鑑みた場合、他の書物や他の人師によって作成された目録等に何らかの情報が記載されていそうだが、現在に至るまで筆者はそのような記述を見出せずにいる。

したがって、削除されたタイミングが具体的にi・iiiのどの時点であったのかという問題については、より一層の検討を必要とするものの、本稿で取り上げている鉤の書き込みは「廬山寺本」撰述時に施されたものと見做して大方問題なさそうである。

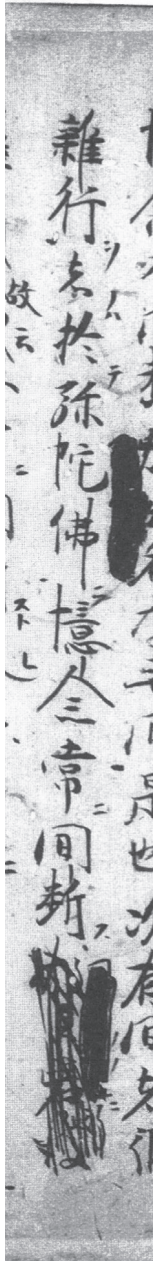
そして、執筆役を務めていた上足の弟子達（遵西・感西・証空<sup>⑫</sup>）が師法然畢生の書へ自らの意志で手を加えるような非行に走ることは決してなかったであろうから、鉤の見せ消ちは法然の指示による、法然の意志が介在した推敲跡と判断されて然るべきものと言えよう。

ただし、「廬山寺本」には本稿で取り上げているような一次的な推敲跡だけではなく、段階を経て二次的に施されたと見られる書き込みが幾つか存在している。

二次的な書き込みと見られる代表的な事例を列挙すれば以下の通りである。

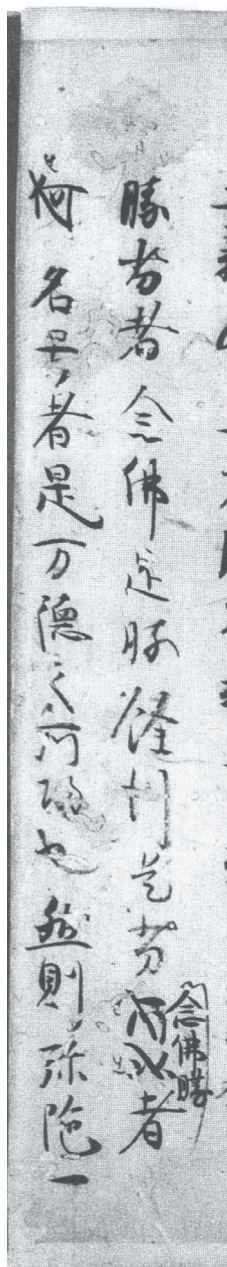
○「一五丁ウ」<sup>⑬</sup>

見せ消ち符号を用いて文字を消去した後、更に縦線を引いたようである。



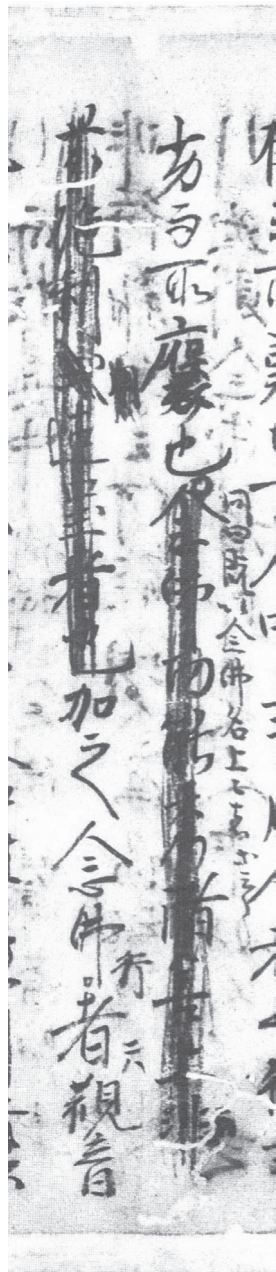
○「二五丁ウ」<sup>(14)</sup>

斜線を記して文字を訂正した後、更に鉤によって訂正後の文字を消去し、続いて元の文字を再生したようである。



○「七三丁ウ」<sup>(15)</sup>

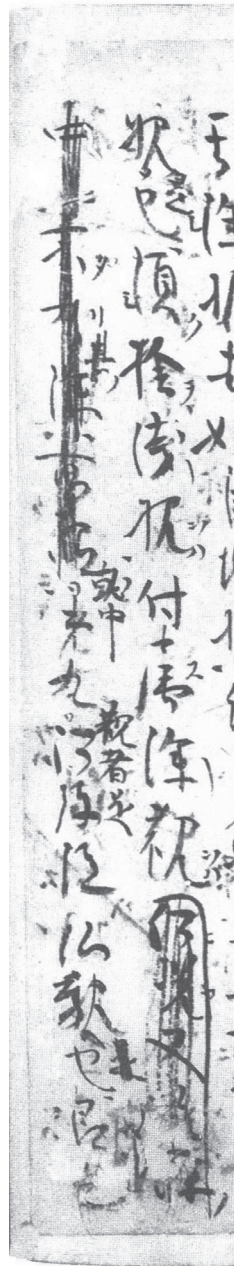
斜線を記して文章を若干訂正した後、更に縦線を引いたようである。<sup>(16)</sup>





○「八五丁ウ」<sup>17</sup>

鉤によつて文字を消去した後、更に縦線を引いたようである。



二次的な書き込みが施されたタイミングは、訓点の付されたタイミング等と合わせて慎重に議論する必要があるため、詳細な検討は別稿を期したい。

とはいえ、いずれにしても先行する法然遺文との関係性や他の『選択集』諸本と比較して草稿本と比定される「廬山寺本」自体に、後世のものであることを指し示す確固たる証拠が存在していない以上、それらの書き込みが施されたタイミングもまたi・iiiの範囲に収束されるのではなからうか。

「廬山寺本」の推敲はある一定の期間行われていたと推定される。<sup>18</sup>「廬山寺本」の本文に二次的な書き込みが確認されるとしても、それは何ら不自然なことではない。

### 三、先行研究の整理

#### 1、第十五章段の成立問題

ここで「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』について議論を展開する前に、「廬山寺本」第十五章段の成立問題や法然による『観念法門』の受容という問題に対して、先学がどのような見解を提示しているのか概観しておきたい。<sup>(19)</sup>

初めに、「廬山寺本」第十五章段の成立問題を最も詳細に論じた研究として、兼岩和広氏による論考が挙げられる。<sup>(20)</sup>「浄土宗の選択集観」<sup>(21)</sup>から第十五章段だけではなく、『選択集』全体の内容を包括的に解説する書として石井教道氏の著作があるが、とりわけ「廬山寺本」関連のこととなると兼岩氏の考究が必ず参照すべき論説となる。

兼岩氏は第十五章段の成立問題に関して、以下のように結論付けている。

『選択集』第十五章の内容がその成立以前より存在していた他の法然遺文を元に作られたとは考えられないのである。<sup>(22)</sup>「第十五章は、」『選択集』の成立時に作られた内容であるとしても問題は無いであろう。<sup>(23)</sup>

以上の兼岩氏の言及は「廬山寺本」より時代的に先行する法然遺文と「廬山寺本」の内容を他の章段まで含め、徹底的に比較した結果導かれたものであり、正鵠を射た意見であると判断される。

更に、兼岩氏は第十五章段で度々引用される『観念法門』の説示より、むしろ同章段の成立に『往生礼讃』の記述が深く関与した可能性をも示唆している。

#### 2、『観念法門』の受容

次に、法然による『観念法門』の受容という問題に取り組んだ論考として、第一に深貝慈孝氏の研究が指摘出来る。<sup>(24)</sup>深貝氏は『観念法門』の五種増上縁義が『選択集』第十五章段で多く引用されていることに注目し、法然の現世利



益観へ焦点を当てて熟考している。

深貝氏によると、第十五章段に法然の私釈が皆無に等しい理由は、法然が「念仏の現世利益の例証を全面的に善導大師によられた」<sup>(24)</sup>からであると判断される。ただし、祈祷等に代表されるような現世の祈りの是認については、善導が基本的に触れない態度を取った一方で、法然は世間の習わしに従ってある程度認める立場を取ったため、両者のスタンスは一線を画していたようである。

第二に、同様の問題を扱ったものとして藤堂恭俊氏・永井隆正氏・明石和成氏による共同研究が存在している。<sup>(26)</sup>

藤堂氏等によって行われた研究は、現存する法然遺文の中で『観念法門』が引用されている文献を抽出し、『観念法門』の内容に準じて列挙していくという非常に作業的な性格が強いものであった。抽出された文献において、『観念法門』の説示がどのように受容されているのか適宜コメントリを付しているものの、紙面の都合上からか詳細な記述は避けられている。

ただし、次節において「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』をめぐる考察する際に、極めて有益な情報が藤堂氏等の研究には記されているので、以下にその点を示しておく。

・この文「、つまり護念増上縁の第二の文」は『選択集』第十五章私釈段（『昭法全』三四六頁）に、「此亦是現生護念増上縁」の十字を除いて全文が引用されている。<sup>(27)</sup>

・『選択集』第十五章私釈段中に<sup>(13)</sup>として掲げた全文、「つまり護念増上縁の第六の文が確認される。」ただし「、そこでは」「此亦是現生護念増上縁」の十字を除いた文（『昭法全』三四六頁）を引用している。<sup>(28)</sup>

・『選択集』第十五章私釈段中に、<sup>(14)</sup>に掲げた文中「、つまり護念増上縁の第九の文の内」「長命安樂」以下の三十五字を除いた全文（『昭法全』三四六頁）を引用している。<sup>(29)</sup>

・この文「、つまり撰生増上縁の第一の文」は『選択集』第三章に、第十八願文に続いて「若我成仏」以下「不取正覺」までの文を引用（『昭法全』三二七頁）している。<sup>(30)</sup>

・「この文、つまり撰生増上縁の第三の文は」『選択集』第四章私釈段の第一問に、…「自来迎接尽得往生」までの全文を引用（『昭法全』三三二頁）している。<sup>①</sup>

・「この文、つまり証生増上縁の第七の文は」『選択集』第十四章において、…「此亦是証生増上縁」という八字を除いた全文を引用（『昭法全』三四四—三四五頁）している。<sup>②</sup>

#### 四、推敲跡を通じた一考察

##### 1、「護念」に関する説示の変化—最後の一文まで引用された背景—

さて、本節では上述した内容を踏まえ、「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』をめぐって考察してみたい。

既に第二節で整理したように、「廬山寺本」第十五章段の引文には「此<sup>レ</sup>ハ是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁ナリ」という一文が記されている。

その一文は推敲を行う中で最終的に法然によって削除されたと考えられるが、では何故そもそも消去するような一文を含んだ状態で『観念法門』の一節が当初は引用されていたのであろうか。

この問題について一考した時、法然が「廬山寺本」第十五章段の撰述時に初めて『観念法門』の一節を使用したため、執筆役であった証空が手控えにはない一節を原典から直接引用することとなり、ひとまず「此<sup>レ</sup>ハ是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁ナリ」の部分まで含めて引用した当時の状況を想定しなければならない。

教義書と呼ばれ、且つ「廬山寺本」より時代的に先行する法然遺文の中には「廬山寺本」第十五章段のメインテーマである「護念」に関して触れている箇所が以下のように散見される。<sup>③</sup>

○寛永九年版『観無量寿経釈』

七<sup>ニ</sup>化仏多少<sup>ト</sup>者、是<sup>レ</sup>円光ノ中ノ化仏ナリ也。…経<sup>ニ</sup>云、於<sup>ニ</sup>円光ノ中<sup>ニ</sup>、有<sup>ニ</sup>三百万億那由他恒河沙ノ化仏<sup>一</sup>。…云云。  
随<sup>テ</sup>円光ノ大小<sup>ニ</sup>、仏<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>多少<sup>一</sup>。…云云。随<sup>テ</sup>逐<sup>ニ</sup>護念<sup>一</sup>、皆<sup>ニ</sup>化仏ナリ也。<sup>34</sup>

○寛永九年版『観無量寿経釈』

二<sup>ニ</sup>第十二<sup>ニ</sup>観<sup>一</sup>無量寿仏化身無數<sup>ト</sup>、与<sup>ニ</sup>観世音大勢至<sup>ト</sup>、常<sup>ニ</sup>来<sup>ニ</sup>至此ノ行人之所<sup>一</sup>。…云云。善導釈<sup>テ</sup>云、若<sup>シ</sup>称礼  
念<sup>ニ</sup>阿弥陀仏<sup>一</sup>、往<sup>ニ</sup>生彼国<sup>一</sup>者、彼ノ仏即<sup>チ</sup>遣<sup>ニ</sup>無數ノ化仏無數ノ化観世音化大勢至菩薩<sup>一</sup>、護<sup>ニ</sup>念<sup>ス</sup>行者<sup>ヲ</sup>。復<sup>タ</sup>与<sup>ニ</sup>  
前<sup>キ</sup>二十五菩薩等<sup>ト</sup>、百重千重圍<sup>ニ</sup>遶<sup>シテ</sup>行者<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>問<sup>ニ</sup>行住坐臥一切ノ時処<sup>一</sup>、若<sup>ハ</sup>昼若<sup>ハ</sup>夜、常<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>離<sup>ニ</sup>マワ<sup>リ</sup>行者<sup>ヲ</sup>。  
今既<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>斯ノ勝益<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>憑。…云云。願<sup>クハ</sup>諸ノ行者、各ノ須<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>心<sup>一</sup>求<sup>ム</sup>往<sup>リ</sup>カントヲ。…云云。<sup>35</sup>

○寛永九年版『阿弥陀経釈』

三<sup>ニ</sup>示現当利益勸<sup>ト</sup>者、分<sup>テ</sup>為<sup>レ</sup>二<sup>一</sup>ト。一<sup>ニ</sup>ハ約<sup>ニ</sup>仏名<sup>一</sup>、二<sup>ニ</sup>ハ約<sup>ニ</sup>シテ往生<sup>一</sup>發<sup>ス</sup>願<sup>ヲ</sup>挙<sup>テ</sup>三ノ益ヲ勸<sup>ム</sup>。一<sup>ニ</sup>約<sup>ニ</sup>仏名<sup>一</sup>者、  
経<sup>ニ</sup>云、若<sup>シ</sup>有<sup>ニ</sup>善男子善女人<sup>一</sup>、聞<sup>ク</sup>是ノ諸仏名及<sup>レ</sup>経名<sup>ヲ</sup>者、是ノ諸ノ善男子善女人、皆<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>一切諸仏<sup>一</sup>、共<sup>ニ</sup>  
所<sup>ニ</sup>護念<sup>セ</sup>、皆<sup>テ</sup>得<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>退<sup>ニ</sup>転於阿耨菩提<sup>一</sup>。…付<sup>ニ</sup>此ノ文<sup>一</sup>、有<sup>ニ</sup>二<sup>一</sup>。一<sup>ニ</sup>者ハ仏名、二<sup>ニ</sup>者ハ経名。初<sup>ニ</sup>仏名<sup>一</sup>者、東方  
阿閼仏、南方日月灯仏、乃至上方梵音仏名也。聞<sup>クモ</sup>此方ノ六方諸仏ノ名<sup>ヲ</sup>、各ノ得<sup>ニ</sup>護念<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>退ノ益<sup>ヲ</sup>也。護念<sup>ト</sup>者、  
聞<sup>ニ</sup>彼ノ諸仏ノ名<sup>一</sup>ト、即<sup>チ</sup>得<sup>ニ</sup>諸仏護念之益<sup>一</sup>也。…云云。不<sup>レ</sup>退<sup>ニ</sup>転。…云云。此<sup>レ</sup>即<sup>チ</sup>現身ノ利益ナリ也。得<sup>ニ</sup>菩提<sup>一</sup>者、  
非<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>護念<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>退<sup>一</sup>、当<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>大菩提<sup>一</sup>也。…二<sup>ニ</sup>経名<sup>一</sup>者、即<sup>チ</sup>此ノ経阿弥陀経ノ名也。三益<sup>ト</sup>者、聞<sup>ク</sup>此ノ経名<sup>ヲ</sup>、如<sup>レ</sup>  
聞<sup>ニ</sup>仏名<sup>一</sup>有<sup>ニ</sup>三ノ益<sup>一</sup>。三益<sup>ト</sup>者、一<sup>ニ</sup>ハ護念、二<sup>ニ</sup>ハ不<sup>レ</sup>退、三<sup>ニ</sup>ハ得<sup>ニ</sup>菩提<sup>一</sup>ナリ。初<sup>ニ</sup>護念<sup>一</sup>者、依<sup>テ</sup>此ノ経名<sup>一</sup>、六方恒沙ノ  
諸仏各ノ護<sup>ニ</sup>念<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。…云云。…依<sup>テ</sup>之<sup>ニ</sup>思<sup>ウ</sup>之<sup>ヲ</sup>、聞<sup>クコト</sup>阿弥陀経ノ名<sup>ヲ</sup>、誠<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>小縁<sup>一</sup>。…云云。次<sup>ニ</sup>惠心問<sup>一</sup>曰、  
此ノ経ノ説<sup>ク</sup>阿弥陀ノ功德<sup>一</sup>之外無<sup>ニ</sup>別体<sup>一</sup>。今ノ文何故ノ別<sup>テ</sup>讚<sup>シ</sup>経名<sup>ヲ</sup>。答<sup>テ</sup>曰、此ノ義不<sup>レ</sup>然<sup>ヲ</sup>。仏ト与<sup>レ</sup>法已<sup>ニ</sup>別ナリ也。

故<sup>ニ</sup>各<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>利益<sup>一</sup>。所以<sup>ニ</sup>仏<sup>ト</sup>者阿弥陀仏也。法<sup>ト</sup>者阿弥陀經ノ名ナリ也。阿弥陀仏<sup>ト</sup>者人也。阿弥陀經<sup>ト</sup>者法也。人法各別也。故<sup>ニ</sup>各<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>利益<sup>一</sup>也。<sup>（二）</sup>云云。次<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>入法各別ノ例<sup>一</sup>。<sup>（三）</sup>云云。略記<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>、如<sup>ニ</sup>下品上生<sup>ノ</sup>者、寿終之時<sup>キ</sup>、聞<sup>テ</sup>諸經ノ名<sup>ヲ</sup>除<sup>ニ</sup>千劫ノ罪<sup>一</sup>、称<sup>スル</sup>仏名<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>除<sup>ニ</sup>五十億劫ノ罪<sup>一</sup>、又大論ノ第九<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>、有<sup>ニ</sup>リ<sup>ノ</sup>比丘<sup>一</sup>、誦阿弥陀經及<sup>ニ</sup>摩訶般若<sup>一</sup>。是<sup>ノ</sup>人欲<sup>レ</sup>死時、語<sup>テ</sup>弟子<sup>ニ</sup>言<sup>ク</sup>、阿弥陀仏、与<sup>ニ</sup>彼<sup>ノ</sup>大衆<sup>一</sup>俱<sup>ニ</sup>来<sup>リ</sup>タマウ。即時<sup>ニ</sup>動<sup>カシ</sup>身<sup>ヲ</sup>自<sup>ラ</sup>歸<sup>ス</sup>。須與<sup>ニ</sup>命終<sup>一</sup>積<sup>レ</sup>薪<sup>ヲ</sup>燒<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。見<sup>ル</sup>舌<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>燒<sup>ケ</sup>。<sup>（四）</sup>云云。明<sup>ニ</sup>知<sup>ヌ</sup>、各<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>利益<sup>一</sup>。<sup>（五）</sup>云云。一<sup>ニ</sup>挙<sup>ニ</sup>發願ノ利益<sup>一</sup>勸<sup>ニ</sup>往生<sup>一</sup>者、付<sup>ニ</sup>利益<sup>一</sup>、有<sup>リ</sup>三<sup>一</sup>。一<sup>ニ</sup>ハ不退<sup>一</sup>、二<sup>ニ</sup>ハ往生<sup>一</sup>、三<sup>ニ</sup>ハ菩提<sup>一</sup>ナリ。此<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>略<sup>ニ</sup>護念<sup>一</sup>。<sup>（六）</sup>云云。

○「善本」古本『漢語灯録』所収『逆修說法』第一七曰

其来迎引接願者、即此<sup>ノ</sup>四十八願中<sup>ノ</sup>第十九願也。人師釈<sup>レ</sup>之有<sup>ニ</sup>多義<sup>一</sup>。先為<sup>ニ</sup>臨終正念<sup>一</sup>来迎<sup>一</sup>。所謂<sup>ニ</sup>疾苦逼<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>將欲<sup>レ</sup>死<sup>ニ</sup>ト之時、必<sup>ス</sup>起<sup>ナリ</sup>境界自体当生<sup>ノ</sup>三種ノ愛心<sup>一</sup>也。而<sup>ニ</sup>阿弥陀如来放<sup>ニ</sup>大光明<sup>一</sup>現<sup>ニ</sup>行者ノ前<sup>一</sup>時、未曾有<sup>ノ</sup>事<sup>ナル</sup>故<sup>ニ</sup>歸敬ノ心ノ外<sup>一</sup>無<sup>シ</sup>他念<sup>一</sup>。而<sup>レ</sup>亡<sup>ニ</sup>三種愛心<sup>一</sup>更<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>起<sup>一</sup>。且<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>仏、近<sup>ニ</sup>行<sup>一</sup>者<sup>ニ</sup>加<sup>ニ</sup>持護念<sup>一</sup>タマウカ故也。称讚淨土經<sup>ニ</sup>說<sup>ケ</sup>慈悲加祐<sup>シ</sup>令<sup>メ</sup>心<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>亂<sup>一</sup>既<sup>ニ</sup>捨<sup>レ</sup>命<sup>ヲ</sup>已<sup>テ</sup>即得<sup>ニ</sup>往生<sup>一</sup>住<sup>ニ</sup>不退轉<sup>一</sup>阿弥陀經<sup>ニ</sup>說<sup>ケ</sup>阿弥陀仏与<sup>ニ</sup>諸ノ聖衆<sup>一</sup>現<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>其前<sup>一</sup>、是<sup>ノ</sup>人終<sup>ニ</sup>心不<sup>レ</sup>顛倒<sup>一</sup>、即得<sup>ニ</sup>往生<sup>一</sup>中<sup>ニ</sup>阿弥陀仏極樂国土<sup>一</sup>。令<sup>ニ</sup>心不<sup>レ</sup>亂<sup>一</sup>与<sup>ニ</sup>心不<sup>レ</sup>顛倒<sup>一</sup>、即令<sup>レ</sup>住<sup>ニ</sup>正念<sup>一</sup>之義也。然者非<sup>ニ</sup>臨終正念<sup>一</sup>故<sup>ニ</sup>来迎<sup>一</sup>。故<sup>ニ</sup>臨終正念<sup>一</sup>ナリトイウ之義明也。…此<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>臨終正念<sup>一</sup>来迎<sup>一</sup>云<sup>フ</sup>義<sup>ハ</sup>、靜慮院ノ靜照法橋<sup>ノ</sup>釈也。<sup>（七）</sup>

○「善本」古本『漢語灯録』所収『逆修說法』第一七曰

次<sup>ニ</sup>阿弥陀經者、初<sup>ニ</sup>說<sup>ニ</sup>極樂世界ノ依正二報<sup>一</sup>、次<sup>ニ</sup>說<sup>ニ</sup>修<sup>ニ</sup>シテ一日七日ノ念仏<sup>一</sup>之往生<sup>上</sup>。後<sup>ニ</sup>說<sup>ニ</sup>ケリ六方ノ諸仏於<sup>ニ</sup>念仏<sup>一</sup>一行<sup>ニ</sup>証<sup>ニ</sup>護念<sup>一</sup>シタマウ之旨<sup>上</sup>。<sup>（八）</sup>

ただし、その典拠に「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』の一節が据えられることは一切なく、ここでは『無量寿経』<sup>39</sup>や『往生礼讃』<sup>40</sup>（後に「廬山寺本」十五章私积段で引用）、『阿弥陀経』<sup>42</sup>、『阿弥陀経略記』<sup>43</sup>、『称讃浄土経』<sup>44</sup>、『四十八願积』<sup>45</sup>といった各経論が適用されるのみである。

そのような状況を考慮すれば、法然が新たに『観念法門』の一節を使用したという出来事と、そこから派生した原典からの引用という作業が相俟つて、証空が「此<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁<sup>ナリ</sup>」という一文まで引用することとなった当時の事情が容易に推察されるのである。

そのような背景があつたからこそ、「廬山寺本」十五章段の引文『観念法門』には他の『選択集』諸本には見られない一文が存在しているのであろう。

## 2、文章削除の理由

証空の判断等もあり、当初は『観念法門』の一節が最後の一文までしっかりと引用されていた訳だが、では何故、法然は最終的にその一文を削除したのであろうか。

以下、便宜上二つの項に分け、検討を行うこととする。

### a、一貫性の保持

先行研究において少なからず言及されている通り、法然は「廬山寺本」において『観念法門』の五種増上縁義を用いる際、基本的に末尾の「…増上縁」という文章を避けていたようである。

例えば、「廬山寺本」第三章段の引文『観念法門』では次のように、「此<sup>レ</sup>即<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>願往生ノ行人、命欲<sup>スル</sup>終<sup>ント</sup>時、願力撰<sup>シテ</sup>得<sup>ニ</sup>シム往生<sup>ヲ</sup>。故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>撰生増上縁<sup>ト</sup>。」の部分が予め除かれている。

○第三章段の引文

『観念法門』 <sup>(48)</sup>	「廬山寺本」 <sup>(49)</sup>
即如無量寿經四十八願中說仏言 若我成仏十方衆生願生我國称我名字下至十声乘我願力若不生者不取正覺	観念法門引上文云 若我成仏十方衆生願生我國称我名字下至十声乘我願力若不生者不取正覺
此即是願往生行人命欲終時願力摂得往生故名摂生増上縁	

更に、このような状況は左記の通り、「廬山寺本」の随所に見られる。

○第四章私釈段中の引文

『観念法門』 <sup>(50)</sup>	「廬山寺本」 <sup>(51)</sup>
又此経下巻初云仏説一切衆生根性不同有上中下随其根性仏皆勧専念無量寿仏名其人命欲終時仏与聖衆自来迎接尽得往生	善導和尚観念法門云 又此経下巻初云仏説一切衆生根性不同有上中下随其根性仏皆勧専念無量寿仏名其人命欲終時仏与聖衆自来迎接尽得往生
此亦是摂生増上縁	



○第七章段の引文

『観念法門』 <sup>(52)</sup>	「禿庵文庫本」(現「廬山寺本」は欠丁) <sup>(53)</sup>
又如前身相等光一一遍照十方世界但有專念阿弥陀仏衆生 彼仏心光常照是人摂護不捨縱不論照摂余雜業行者 此亦是現生護念増上縁	観念法門」云 又如前身相等光一々遍照十方世界但有專念阿弥陀仏衆生 彼仏心光常照是人摂護不捨惣不論照摂余雜業行者

○第十四章段の引文

『観念法門』 <sup>(55)</sup>	「廬山寺本」 <sup>(56)</sup>
又如弥陀経云六方各有恒河沙等諸仏皆舒舌遍覆三千世界 説誠実言若仏在世若仏滅後一切造罪凡夫但廻心念 阿弥 陀仏願生浄土上尽百 years 下至七日一日十声三声一声等命欲 終時仏与聖衆自来迎接即得往生如上六方等仏舒舌定為凡 夫作証罪滅得生若不依此証得生者六方諸仏舒舌一出口已 後終不還入口自然壞爛 此亦是証生増上縁	善導観念法門云 又如弥陀経云六方各有恒河沙等諸仏皆舒舌遍覆三千世界 説誠実言若仏在世若仏滅後一切造罪凡夫但廻心念 阿弥 陀仏願生浄土上尽百 years 下至七日一日十声三声一声等命欲 終時仏与聖衆自来迎接即得往生如上六方等仏舒舌定為凡 夫作証罪滅得生若不依此証得生者六方諸仏舒舌一出口已 後終不還入口自然壞爛

○第十五章私釈段中の引用 1

『観念法門』 <sup>(57)</sup>	「廬山寺本」 <sup>(58)</sup>
又観念法門云 又如観経下文若有人至心常念阿弥陀仏及二菩薩観音勢至 常与行人作勝友知識随逐影護 此亦是現生護念増上縁	又観念法門云 又如観経下文若有人至心常念阿弥陀仏及二菩薩観音勢至 常与行人作勝友知識随逐影護

○第十五章私釈段中の引用 2

『観念法門』 <sup>(59)</sup>	「廬山寺本」 <sup>(60)</sup>
又云 又如般舟三昧経行品中説云仏告跋陀和若有人七日夜在 道場内捨諸縁事除去睡臥一心専念阿弥陀仏真金色身或一 日三日七日或二七日五六七七或至百日或尽一生至心観 仏及口称心念者仏即摂受既蒙摂受定知罪滅得生浄土仏言 若人専行此念弥陀仏三昧者常得一切諸天及四天大王龍神 八部随逐影護愛樂相見永無諸惡鬼神災障厄難横加悩乱具 如護持品中説 此亦是現生護念増上縁	又云 又如般舟三昧経行品中説云 若人専行此念弥陀仏三昧者常得一切諸天及四天大王龍神 八部随逐影護愛樂相見永無諸惡鬼神災障厄難横加悩乱具 如護持品中説

○第十五章私釈段中の引用3

『観念法門』 <sup>61</sup>	「廬山寺本」 <sup>62</sup>
<p>除入三昧道場日別念弥陀仏一万畢命相続者即蒙弥陀加念 得除罪障又蒙仏与聖衆常来護念既蒙護念即得延年転寿 長命安楽因縁一具如譬喻経惟無三昧経浄度三昧経等説 此亦是現生護念増上縁</p>	<p>又云 除入三昧道場日別念弥陀仏一万畢命相続者即蒙弥陀加念 得除罪障又蒙仏与聖衆常来護念既蒙護念即得延年転寿</p>

上記の整理からすれば、本稿で取り上げている「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』の引用方法がいかにかに特異的であるのか理解される。

おそらく、法然は他の引用箇所との一貫性を保持するため、最終的に「此<sup>レハ</sup>是<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁<sup>ナリ</sup>」という一文を意図的に削除したのであろう。

b、語義概念の明確化

「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』の一文が五種増上縁義の「…増上縁」という箇所である以上、その一文が削除された根本的な理由は、「廬山寺本」撰述時に「…増上縁」という文章が忌避された何らかの事情と軌を一にしている。

そこで注目したいのが省かれた文章に共通して存在する「増上縁」という言葉である。

実は、「廬山寺本」内においてこの増上縁の語句が使用されている事例を調べてみると、第七章段の引文『観経疏』

の中に二箇所、本稿で取り上げている第十五章段の引文『観念法門』の中に一箇所の計三箇所にしかその用例を見出せない。<sup>(65)</sup>

ただし、最後の一箇所は本稿第二節で整理したように結局削除されているため、完成された本文では第七章段の引文『観経疏』の中に登場する次の二箇所のみが増上縁の語句を使用した例と認められよう。<sup>(66)</sup>

三三明増上縁<sup>一</sup>。衆生称念<sup>スレバ</sup> 即除<sup>ク</sup>多劫ノ罪<sup>一</sup>。命欲<sup>スル</sup>終<sup>ント</sup>時、仏与<sup>ニ</sup>聖衆<sup>ト</sup>自<sup>ラ</sup>来<sup>テ</sup>迎接<sup>シタマウ</sup>。諸邪業繫、無<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>礙<sup>ル</sup>者<sup>一</sup>。故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>増上縁<sup>ト</sup>也。<sup>(66)</sup>

このような状況を加味すれば、法然は『観念法門』の増上縁の概念ではなく、『観経疏』のそれを念頭に置きつつ「廬山寺本」の撰述に取り組んでいたと推定される。

では、法然が念頭に置いていた『観経疏』所説の増上縁とは一体何なるものであったのだろうか。

ちなみに、『観経疏』では光明に関して述べた増上縁の一節以外にも、

言<sup>ハ</sup>弘願<sup>ト</sup>者如<sup>シ</sup>大經<sup>ニ</sup>說<sup>一</sup>。一切善惡ノ凡夫、得<sup>レ</sup>ルコトハ生<sup>スル</sup>コトヲ者莫<sup>シ</sup>不<sup>下</sup>。皆乘<sup>シテ</sup>阿弥陀仏ノ大願業力<sup>ニ</sup>為<sup>中</sup>増上縁<sup>ト</sup>也。<sup>(66)</sup>

と弘願について触れる中で、本願力と同時に増上縁が言及されている。

そのため、増上縁の一節や上掲した一節から『観経疏』所説の増上縁は「光明」や「本願力」等の位置付けが『観念法門』所説の増上縁とは多少異なっていると見て取れそうであるが、おそらく法然もそのような相違に気付き、概念を区別していたのではなからうか。

とすれば、法然は「廬山寺本」撰述時において増上縁の語義概念を『観無量寿経』の第九真身観に説かれるような光明摂取の関係性、即ち「凡夫が阿弥陀仏の御名を称えさすれば、凡夫は阿弥陀仏の光明に照らされると同時に罪を除滅することが出来、更に本願力に乗じることで命終時、往生の大益を得、一方で阿弥陀仏はその凡夫を自らが成就した本願に基づき、平生は光明で照らし、或いは臨終にあたり来迎することによって摂取して見捨てない」という凡夫と阿弥陀仏

の二者間に構築される、現世から来世へと続く強固な相互関係性と定義していた蓋然性が高いように思われる。<sup>(98)</sup>

だからこそ、『観念法門』の「…増上縁」という部分の使用を徹底的に退け、或いはその文章が本文へ記されている場合、語義概念に齟齬が生じないよう文章を削除したのであらう。

## 五、おわりに

本稿ではここまで推敲跡の状態、並びに先行研究を確認した上で、「廬山寺本」第十五章段の引文『観念法門』をめぐって筆者独自の視点から考察してきた。

その結果、法然が「廬山寺本」第十五章段の撰述時に初めて『観念法門』の一節に立脚し、諸仏や諸菩薩等による念仏行者の護念に関して述べた事実を明らかに出来、加えて執筆役であった証空が法然より指示された一節を原典から直接引用することとなり、意味内容に従ってひとまず「此<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>亦現生護念増上縁<sup>ナリ</sup>」という一文まで記載した当時の状況について論及し得たと考える。

更に、「廬山寺本」における『観念法門』の引用状況に基づき、文章を削除した理由が一貫性の保持、より正確には語義概念の明確化へ求められると結論付けられたように思える。

尚、本稿では考察の過程で主に「廬山寺本」の引用状況を整理したが、「廬山寺本」以外の幾つかの法然遺文にも『観念法門』の「…増上縁」の文章を意図的にカットする場面が見受けられる。<sup>(99)</sup>

そのため、もしかしたら法然は増上縁を説示する際、生涯を通じて善導著「四部八卷」の書物の内、増上縁について最も詳述されている『観念法門』の「増上縁」の用語を基本的な用いなかっただのではないかと察せられる。<sup>(10)</sup>

このように、「廬山寺本」の推敲跡は非常に数多くの情報を提供しており、今後とも引き続き探究して行きたい。

註

- (1) 藤堂恭俊「廬山寺藏古鈔本選択集の諸問題」〔『佛教大学研究紀要』六三、一〇三七頁、一九七九〕、並びに兼岩和広「廬山寺藏『選択集』第八章における『観経疏』の引文について」〔『仏教論叢』四二、五二一―五七頁、一九九八〕、林田康順「廬山寺藏『選択集』における偏依善導一師をめぐる推敲」〔『仏教文化学会紀要』一〇、三四―五九頁、二〇〇一〕、柴田泰山「法然遺文中における寿観二経説示前後論について」〔『廣川堯敏教授古稀記念論集 浄土教と仏教』一九九―二三〇頁、山喜房仏書林、二〇一四〕等参照。
- (2) 大正大学浄土宗宗典研究会編『『選択集』諸本の研究〈資料編〉』一・廬山寺本（原本写真版、二九―三〇頁、文化書院、一九九九）参照。尚、以下は同書を「平成一一年版」と記す。
- (3) 「平成一一年版」（原本写真版、八八―九〇頁）参照。
- (4) 「平成一一年版」（原本写真版、九八頁）参照。訓点は『浄全』四・二二九上等を参考とした。以下、同内容の出典註は省略する。
- (5) 兼岩和広『『選択集』の成立史的研究』付録資料「廬山寺本」翻刻（二〇五頁、国立国会図書館蔵、二〇〇三）参照。
- (6) 「平成一一年版」（原本写真版、九八頁）。訓点は『昭法全』三四五を参考とした。
- (7) 「平成一一年版」（原本写真版、九八頁）。
- (8) 基本的に異体字は正字体、旧字体は新字体に改め、常用漢字を用いた。翻刻資料の作成にあたり「平成一一年版」（翻刻、九八頁）、並びに前掲註5兼岩氏論文付録二〇四―二〇五頁を参考とした。
- (9) 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊』四〔『集諸経礼懺儀 卷下』二二二頁、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一〇〕等参照。
- (10) 「平成一一年版」（原本写真版、一一〇頁）参照。
- (11) 岸一英「金剛寺藏『選択集』上・下解説」〔落合俊典『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』



研究成果報告書』一、三九三～四〇八頁、高山、二〇〇七）等参照。

- (12)『浄全』七・五四七上、並びに上田良準『選択集』草稿本第三筆は西山上人証空（『西山学报』三三、一～二四頁、一九八四）参照。

(13)「平成一二年版」（原本写真版、一七頁）。

(14)「平成一二年版」（原本写真版、二七頁）。

(15)「平成一二年版」（原本写真版、七五頁）。

(16)尚、二行に渡って引かれている縦線は墨色が本文の文字や他の縦線と比較して薄いようである。

(17)「平成一二年版」（原本写真版、八七頁）。

(18)拙稿「廬山寺蔵『選択本願念仏集』における法然上人による推敲―第十二章段において見せ消された寿観二經説示前後論をめぐって―」（『仏教文化学会紀要』二七、所収予定）参照。

(19)尚、本節では代表的な先行研究のみ整理を行った。ご容赦いただきたい。

(20)兼岩和広『選択集』の成立史的研究（四八一～四九六頁、国立国会図書館蔵、二〇〇三）参照。

(21)石井教道『選択集全講』（第二「序」二頁、平楽寺書店、一九五九／二〇〇〇）。

(22)前掲註21石井氏著作参照。

(23)前掲註20兼岩氏論文四八五頁。

(24)深貝慈孝「法然上人と『観念法門』―特に現世利益について―」（『浄土宗開宗八百年記念 法然上人研究』

二九五～三一九頁、隆文館、一九七五）参照。

(25)前掲註24深貝氏論文三一八頁。

(26)藤堂恭俊・永井隆正・明石和成「法然上人における善導教学の受容とその展開―とくに『法事讃』・『観念法門』の受容と展開に関する基礎資料について―」（『仏教文化研究』二六、六七～八二頁、一九八〇）参照。

- (27) 前掲註26 藤堂氏他論文七七頁。  
 (28) 前掲註26 藤堂氏他論文七七頁。尚、引用に際して文章表現を一部訂正した。  
 (29) 前掲註26 藤堂氏他論文七七頁。  
 (30) 前掲註26 藤堂氏他論文七七頁。尚、引用に際して文章表現を一部訂正した。  
 (31) 前掲註26 藤堂氏他論文七八頁。  
 (32) 前掲註26 藤堂氏他論文七八頁。  
 (33) 東大寺講説『三部経釈』の中で後に所謂、広本『選択集』から文章が挿入された部分については除いた。この点については岸一英『逆修説法』と『三部経釈』（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 研究篇』一〇三～一三九頁、同朋舎出版、一九八八）等参照。  
 (34) 『昭法全』一〇四。  
 (35) 『昭法全』一二二。尚、浄土宗宗典研究室編『寛永・承応・正徳三版対照観無量寿経釈』（佛教大学蔵、私家版）所収の影印資料に基づき、本文と訓点を一部訂正した。  
 (36) 『昭法全』一五三～一五四。尚、浄土宗宗典研究室編『寛永・承応・正徳三版対照阿弥陀経釈』（佛教大学蔵、私家版）所収の影印資料に基づき、本文と訓点を一部訂正した。また、「善本」古本『漢語灯録』所収『阿弥陀経釈』（『昭法全』一四〇～一四一）も文意は同じである。  
 (37) 『昭法全』二三四。尚、『浄全』一・一八八上に基づき、訓点を一部訂正した。  
 (38) 『昭法全』二三七。尚、浄土宗総合研究所編『黒谷上人語灯録写本集成』1（二五七頁、浄土宗、二〇一一）所収の影印資料に基づき、本文と訓点を一部訂正した。  
 (39) 『浄全』一・四三～四四、並びに『浄全』一・四六。  
 (40) 『浄全』四・三七五下～三七六上。

- (41)「平成二年版」(原本写真版、九九頁)参照。
- (42)『浄全』一・五四、並びに『浄全』一・五五。
- (43)『正蔵』五七・六八一上、並びに『正蔵』五七・六八一上〜中。
- (44)『浄全』一・一八八上。
- (45)『続浄』四・五下。
- (46)詳しくは本稿第三節末尾の整理を参照。
- (47)『正蔵』四七・二七上。訓点は『浄全』四・三三上を参考とした。
- (48)『正蔵』四七・二七上。
- (49)「平成二年版」(原本写真版、二二頁)。
- (50)『正蔵』四七・二七上。
- (51)「平成二年版」(原本写真版、三五頁)。
- (52)『正蔵』四七・二五上〜中。
- (53)大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』諸本の研究〈資料編〉五・禿庵文庫本(翻刻、一九頁、文化書院、一九九九)。
- (54)「平成二年版」(原本写真版、四九頁)。
- (55)『正蔵』四七・二八上。
- (56)「平成二年版」(原本写真版、九五〜九六頁)。
- (57)『正蔵』四七・二五上。
- (58)「平成二年版」(原本写真版、九九頁)。
- (59)『正蔵』四七・二五中。

(60)「平成二年版」(原本文写真版、九九〜一〇〇頁)。

『正蔵』四七・二五下。

(61)「平成二年版」(原本文写真版、一〇〇頁)。

(62)「平成二年版」(原本文写真版、四八〜四九頁、九八頁)参照。

(63)「廬山寺本」第十五章段の引文『往生礼讃』には

若シ称<sup>シテ</sup>仏<sup>ヲ</sup>往生スル者ハ常ニ為<sup>メ</sup>ニ六方恒沙等ノ諸仏<sup>ノ</sup>之所<sup>ニ</sup>護念<sup>セ</sup>故<sup>ニ</sup>名<sup>ヲ</sup>護念<sup>ノ</sup>經<sup>ト</sup>。今既<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>斯<sup>ノ</sup>増上<sup>ノ</sup>誓願<sup>ノ</sup>可<sup>キ</sup>レ憑<sup>ム</sup>。諸ノ仏子等何ソ<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>励<sup>ム</sup>意<sup>ヲ</sup>者也(「平成二年版」原本文写真版、九八頁、訓点は『昭法全』三四六参考)。

と「増上」の語句が確認され、それを法然は『浄土宗略抄』において

又いわく、弥陀を念して往生せんとおもふものは、つねに六方恒沙等の諸仏のために護念せらる。かるかゆえに護念經となつく。いますてにこの増上縁の誓願のたのむべきあり。もろくの仏子等、いかてか心をはけまさらんやといえり(『昭法全』六〇四)。

と解説を交えて引用している。しかし、『往生礼讃』の原文は厳密に言えば「増上縁ではなく、「増上」である。更に、「廬山寺本」内においては『往生礼讃』のこの箇所が「増上縁」であるとは一度も明言されていない。おそらく、『浄土宗略抄』に見られるこのような解釈は『選択集』撰述の後に成立したものではなからうか。加えて、この『往生礼讃』の「増上」の語句は「勝れた」「強い」の意味で理解することも可能である。この点については内藤昭文「増上縁について(一)―その意味と宗学上における理解について―」(『教学研究紀要』六、九九〜一三一頁、一九九八)、並びに内藤昭文「増上縁について(二)―その意味と背景について―」(『教学研究紀要』七、五七〜八四頁、一九九九)等を参照されたい。

(65)「平成二年版」(原本文写真版、四八〜四九頁)。訓点は『昭法全』三二七を参考とした。

(66)『浄全』二・二上。

(67)この点については柴田泰山『善導教学の研究』二(一八五)三二頁、山喜房仏書林、二〇一四)等を参考とした。  
(68)この点については林田康順「法然における来迎思想の展開」(『鳳翔学叢』七、六三)八三頁、二〇一一)等を参考とした。

(69)寛永九年版『無量寿経釈』(『昭法全』七七)七八)や寛永九年版『阿弥陀経釈』(『昭法全』一四九)、「善本」古本『漢語灯録』所収『阿弥陀経釈』(『昭法全』一三五)、「善本」古本『漢語灯録』所収『逆修説法』第五七日(『昭法全』二六七)、「善本」古本『漢語灯録』所収『浄土宗略要文』(『昭法全』四〇〇)、「正如房へつかわす御文」(『昭法全』五四一)五四二)、「御消息」(『昭法全』五八二)、「浄土宗略抄」(『昭法全』五九二)等にも『観念法門』の説示を踏まえて述べられている内容が見受けられるが、何れの箇所においても「増上縁」の文章については全く触れられていない。この点については前掲註26藤堂氏他論文七六)八〇頁等を参照されたい。

(70)『往生大要抄』(『昭法全』六〇)、「並びに寛永九年版『観無量寿経釈』(『昭法全』一二二)、『三心料簡および御法語』(『昭法全』四四八)等には増上縁に関する内容が確認されるものの、主に『観経疏』を典拠にしているようである。

#### 凡例

- 一、塗りつぶしは推敲跡、「」は補筆、∴は省略、「」は割註を示す。
- 一、句読点を一部改めた。
- 一、送り仮名の漢字表記や合略仮名、踊り字は基本的にカタカナへ改めた。
- 一、表中の訓点は省略した。
- 一、『和語灯録』、『拾遺和語灯録』所収の法然遺文は「元亨版」を使用した。